

第6回

歯科口腔外科新シリーズ

北アルプス医療センターあづみ病院
歯科口腔外科副部長 飯島 響

口腔内細菌と全身疾患 〈1〉

●口の中は細菌でいっぱい！

人間には700種に及ぶ細菌などの微生物が寄生しているとされ、なかでも口の中にはその4割を超える300種以上の細菌が存在しているといわれています。これらの細菌は口の中に最初から存在しているわけではなく、赤ちゃんは無菌状態で生まれてきます。乳幼児期に両親などから食物を口移しされたり、共用したスプーンやお箸などを介して細菌などの病原体が口の中に侵入し住み着くと考えられています。

また、歯垢(プラーク)1g中に含まれる細菌数は1000億個ともいわれ、これは糞便1g中の細菌数に匹敵する量です。口の中は私たちの想像以上に不潔で不衛生な場所なのです。

とはいえ、私たちは日頃、口の中の細菌数など意識せずに生活をしています。せいぜいうがいをしたり食後に歯を磨くぐらいです。その程度の事で300種以上の細菌から身を守るのでしょうか？胃のピロリ菌を除菌するみたいに口腔内の細菌を除菌死する必要があるのでしょうか？

●口腔常在菌との良い関係

実は、口の中の細菌の多くは病原性の弱い常在菌なのです。私たちが健康な生活を送り、毎日、歯磨きをきちんとしている限り、口腔常在菌は私たちに害を為すどころか、病原性の強い細菌の侵入や定着・増殖を防ぐ役目を担っているのです。つまり、常在菌と私たちの間には良好な共生関係が保たれているのです。

ところが、口の中が汚れていたり、他の疾患や生活習慣、加齢などが原因で体の抵抗力が低下すると口腔内の細菌構成が変わって病原性の強い細菌が増えていき、その結果、口腔感染症が生じたり全身疾患を誘発したりすると考えられています。

また、下手に除菌を行うことで共生関係が損なわれ、常在菌を失った口腔は外部からの病原体の侵入に対して無防備になってしまつでしょう。毎食後の歯磨きは歯垢(プラーク)中の細菌量を適切にコントロールし共生関係を維持するための、簡便にして効果的な方法なのです。

●歯周病原菌

このような口腔常在菌の中で近年、注目を浴びているのが歯周病原菌です。

歯垢(プラーク)中で増殖した歯周病原菌が歯

周ポケットに入り込み繁殖する事で生じる慢性炎症が歯周病です。歯周病が進行すると、歯を支えている歯周組織が炎症により破壊され、やがて歯の喪失に至ります。

日本人の70%以上が歯周病に罹患しているといわれていますが、世界的にみても同様の傾向にあり『全世界で最も患者が多い病気は歯周病である。地球上を見渡しても、この病気に冒されていない人間は数えるほどしかない』とギネスブックにも載っている程です。また、高齢者が罹患する疾患とのイメージがありますが10代で4割弱、20代で約5割の人に歯周病の初期症状が出現しているとされ、若年者にも無縁の病気ではありません。このありふれた古典的疾患ともいえる歯周病が注目を集めているのには理由があります。近年の研究や疫学調査により、歯周病原菌が糖尿病や細菌性心内膜炎、菌血症、動脈硬化、心筋梗塞、脳卒中などの様々な全身疾患の誘因となっている事が明らかになって来たのです。

〈次号に続く〉

